

経営者および経営者候補者に読んでほしい書籍

2020年3月30日 杉林弘仁

■前置き

今回のテーマについてはいろいろ思いめぐらし考え、何がいいのか選べず、というより思い出せません。後出しじゃんけんで、皆さんの選書を見て本棚からとりだしてみると、フセンはあるは、線はひいてあるは、書き込みがあるはで、でも中身が思い出せずで、まったく困ったものです。

で、どうしようにしようかと考え、コンパクトに、

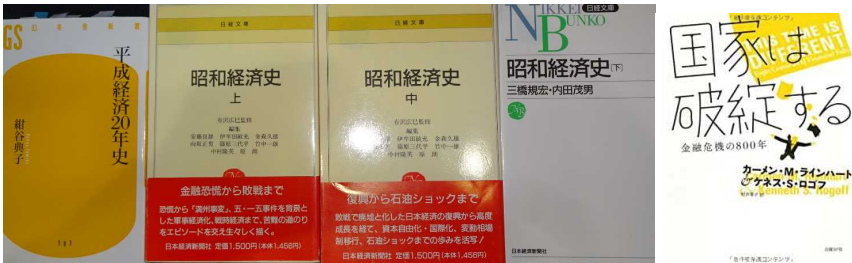
経済・マーケティング・イノベーション・人間にしてみました。

●経済

・経営ですから、経済史を追っておいてほうがと思っけていまして、日経文庫で「4冊」安藤 良雄 (編集),1994『昭和経済史 (上)』日経文庫
いろいろな経済理論がありますがよくは知りませで、いいと思っけているのは、シュンペーターの景気循環説をベースにおいて整理する方法かなと思っけています。

例示したこの本がというわけではありません。著者によっていろいろな解釈をしているので、比較してみると面白いのですが、淡々と事実ベースを追うには日経文庫が時代をおって出版しているので候補にしました。

・あとは、昨今の経済波動を、金融から追ってみる1冊として(輪読図書でしかか?) (2011)『国家は破綻する——金融危機の800年』(邦訳 日経BP社)



・また、資本論はどこかでみておかないと思っけていまして、まだ途中ですが、佐々木 隆治 (2018)『マルクス 資本論 シリーズ世界の思想』(角川選書)

●マーケティング

スティーブン ブラウン (2005)『ポストモダン・マーケティング 「顧客志向」は捨ててしまえ!』
この根は深く 1976年のハーバードビジネスレビューのコトラーが確立したマーケティング体系の否定論争が端緒かなと思っけています。マーケティング体系はビジネスを整理してみるぐらいにはいいと思っけていますが、マーケティングは1912のショーの以前から現代を眺めるのがいいと思っけています。

●イノベーション

P.F.ドラッカー (2007)『イノベーションと企業家精神 (ドラッカー名著集)』
ダイヤモンド社

・読みにくい古さがあるうえに、同じようなことが何度もでてきて、体系は感じられませんが、ドラッカー一流のエッセイのような経営学のなかで、温故知新が拾える1冊かなと。デザイン「美」と経営とイノベーションを結んで考えると、ロベルト・ベルガンティ（2016）『デザイン・ドリブン・イノベーション』立命館大学 DML（邦訳）。



●人間心理

経営は人間が土台なので、ジェイン オースティン（2011）『高慢と偏見（上・下）』 光文社古典新訳文庫。著者は村を殆ど出たことがなかったが、おさえることのできない人間に巣く本質を暴き出した本で、カズオ イシグロの（2001）『日の名残り』（ハヤカワ epi 文庫）のバックボーンと感じられる本。



○関連して、商人

司馬遼太郎『菜の花の沖（1）～（6）』文藝春秋

商人のあり方を考えるうえで、読み物としても、あるべき姿に向かわせる1冊かなと。

○最後に、

この件を、昨日一緒に旅行した大手薬品会社の元経営者に聞いてみますと稲盛和夫の『生き方』でした。やはり最終は、小手先の利益ではなく、「善」とか「徳」にいくように思いました。



以上です。